



画面中央、フォークが伸びている先にあるのは、「あのドリアン」である。

その匂いにより、近づくこともはばかるようなモノが、何故ここに。

ここは、タイのラヨン（バンコクより東へ2時間）にある発電所の社員食堂である。

来客用のテーブルは一般社員のテーブルとは仕切られているものの、同じ空間である。

ここにドリアンが登場したのだから驚きであった。

でも、そこは、よくしたもの、まだ、熟してないドリアンであり、匂いの恐怖は皆無であるから納得。

その分、味は淡泊で面白くない。

やはり鼻が曲がり気絶するほどの匂いを発してこそドリアンであろう。

でも、そのおいしさで、匂いも癖になるともいわれているのに、その境地に至らないの、まだここでの修行が足りないのか。

タイはトロピカルフルーツの宝庫である。

こうして、毎日毎日、品を替え、食後に出される果物に感激だ。